



TITLE:

<批評・紹介>川本吉昭著 魏晉南北朝時代の民族問題

AUTHOR(S):

石見, 清裕

CITATION:

石見, 清裕. <批評・紹介>川本吉昭著 魏晉南北朝時代の民族問題. 東洋史研究 2000, 58(4): 777-790

ISSUE DATE:

2000-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155268>

RIGHT:

川本芳昭著

魏晉南北朝時代の民族問題

石 見 清 裕

本書は、長年精力的に中國魏晉南北朝時代の漢族と非漢族との接觸・融合の事象と、それが中國史に果たした役割とを考察されてきた川本芳昭氏が、その既發表の論考二二篇をテーマに沿って分類し、一書にまとめられたものである。これまでも多くの研究者が、當該問題を川本氏がどのように理解されたか、氏の論文を參考にしてきたはずであり、評者もまたその一人であった。そうした意味からも、現段階における川本氏の研究のほぼ全貌がこうした形で提示されたことは誠に喜ばしく、學界に寄與するところ大であると思われる。そこで、本書の内容を紹介・批評し、あわせて今後の問題點を考えてみたい。

書評の都合上、本書の章立てを掲げれば次のとおりである。

はじめに

第一篇 胡漢抗爭と融合の軌跡

第一章 五胡十六國・北朝時代における華夷觀の變遷

第二章 五胡十六國・北朝時代における「正統」王朝について

第三章 景穆太子と崔浩——北魏太武帝による廢佛前後の政局をめぐって——

第四章 部族解散の理解をめぐって

第二篇 北魏孝文帝改革前の政治・社會體制と孝文帝的改革

第一章 內朝制度

第二章 監察制度

第三章 封爵制度

第四章 北族社會の變質と孝文帝的改革

第五章 孝文帝的パーソナリティと改革

第六章 北族集團の崩壊と太和二十年の謀反・北鎮の亂

第三篇 五胡十六國・北朝時代における胡漢融合について

第一章 北魏における身分制について

第二章 五胡十六國・北朝史における周禮の受容をめぐって

第三章 胡族漢化の實態について

第四篇 蠻漢抗爭と融合の軌跡

第一章 六朝期における蠻の漢化について

第二章 六朝における蠻の理解についての一考察——山越・蠻漢融合の問題を中心としてみた——

第三章 蠻の問題を中心としてみた六朝期段階における各地域の状況について

第五篇 四・五世紀における東アジアの國際關係

第一章 倭の五王による劉宋遣使の開始とその終焉

第二章 四・五世紀の中國と朝鮮・日本

第三章 高句麗の五部と中國の「部」についての一考察 おわりに

まず、右の構成を参照しながら、本研究の基底を貫く著者川本氏の基本的視座を確認しておきたい。本書の「はじめに」で、著者は

次のように述べる。魏晉南北朝時代の中國社會に見られる最も特徴的な現象は、漢帝國崩壊後の中國内外の諸勢力の激突によつてもたらされた「民族移動」現象であり、それが東アジアの諸民族に種々の變容を生み出すことになった。そうした變容は、北方民族が漢民族に同化するというだけでなく、北方民族の移動によつて政治・文化のあらゆる分野にわたつて漢民族のあり方が變質させられてもたらされた。一方、こうした變化は南方世界においても見られ、漢民族の南方移動は江南社會にも大きな變容をもたらした。山越等の江南先住民の漢民族化だけでなく、先住民との接觸によつて江南移住の漢民族社會にも變容が生じたのである、と。

こうした觀點から、著者は分析の視點を次のようにまとめる。

① 五胡諸民族の移動は、具體的には當時の中國世界のどの部分にどのような變革をもたらしたか。

② 長江以南の非漢族はどのように漢族に吸収され、また漢民族形成にいかなる意味を與えたか。

③ それらと關連して、中國における民族變容が、中國周邊諸民族の國家形成・民族形成にどのような影響を與えたか。

このうち、①の視點に立つ諸論考が本書の章立ての第一―三篇に相當し、②の視點が第四篇に、③の視點が第五篇にそれぞれ割りふられている。①に多くの枚数が割かれているのは、魏晉南北朝期の民族抗争・融合を考察するにあつて、五胡等の北方民族が果たした役割を抜きにして語ることはできず、それどころか北朝は彼ら北族が政權を掌握したために、北族と漢族との接觸・軋轢がストレートに史料に反映され、そこから多くの問題點を浮かび上がらせることができるからであらう。著者のこれまでの研究も、この點に中心

が置かれていたといつてよい。ただし、著者の研究の大きな特徴の一つは、北朝史のみならず南朝史をも分析の對象としている點にある。それは著者が、やがて隋唐政權を生み出す前提として北朝史をとらえているだけではなく、魏晉南北朝という時代が漢民族の形成とその歴史において一體いかなる意味をもつたのかという點にこそ、強い問題意識を抱いているからであらう。それならば、本書はそれを個々にどのように分析したのであらうか。以下、順を追つて見てみよう。

まず第一篇では、魏晉南北朝期における北方民族と漢族との抗争・融合過程の底流をつかもうとする。

第一章は、胡族の漢族觀、漢族の胡族觀のあり方とその變遷をたどり、當時の中國における意識面での胡漢融合の實相に迫る論考。西晉・五胡十六國期の胡族と漢族はそれぞれ自（我）と他（非我）とを明らかに峻別しており、そうした意識の根底には、漢族側には胡族に對する文化的優越感とそれに伴う蔑視觀、および被支配者としての屈辱感・恐怖感が存在し、一方胡族側には漢族に對する軍事的優越感とともに文化的劣等感・反撥觀が混在していた。こうした自我意識は北魏初期にも確認されるが、それが孝文帝期になると、漢族士大夫層の間に北魏を自らの王朝と認識する史料が散見されてくる。この變化の分岐點を、著者は太武帝期とみる。それは、太武帝期に鮮卑拓跋政權は他の胡族政權をも支配下におさめて華北を統一したため、胡族・漢族の民族差を越えた中華政權を志向し始めるからであり、太武帝の廢佛斷行もそれによつて理解できるからである。この太武帝期の胡漢對立解消という現象が、孝文帝期には胡族

の漢族社會への同化の色彩を強め、南朝に對する憧憬やひけ目の意識も薄れ、ちょうどその頃、南朝では侯景の亂による建康壊滅や西魏による江陵陥落があつて華夷觀の存在基盤が失われ、ここに北朝を正統とする思潮が確立し、それが隋唐に受け繼がれる。例の西魏の胡姓再行も、そうした政策を施行しても違和感のない新たな中華世界がそこに出現していたことを裏づける。ただし、胡姓再行は政治的・軍事的意味合いも強いと思われ、果たして胡漢融合を跡づけるだけで解答が得られるかどうか等の點は、問題が残ろう。なぜなら、太武帝廢佛の政治的背景は後掲第三章で専述されるが、西魏・北周、東魏・北齊期の專論は本書にはないからである。ただ、そうはいっても本章は、從來議論されているようで實はさほど正面から取り上げられてはこなかった内面の民族意識の變遷を追っており、著者が本書で展開する議論の基底ともいうべき見解が示されている。本章が冒頭に置かれたのもそのためであり、以下第三篇までは本章から個々の問題が掘り下げられる。

第二章では、「五胡」「十六國」「五胡十六國時代」等の呼稱がいつごろ確立されるかという問題から出發し、五胡十六國・北朝時代における諸王朝の正統意識を考察する。北魏は、拓跋氏が黃帝の子孫を自認したところから五行では土徳を採用したが、孝文帝期に晉(金徳)を直接繼承する王朝として水徳に改められた。その背景には、東晉の滅亡、劉宋の出現によつて華北の漢人士大夫層の南朝志向が薄れ、やがては南朝を島夷として非正統と見るまでに彼らの意識が變化したこと、一方胡族の諸政權には、東晉を正統と見る意識と自らを中華と認識するものとが混在したが、それらも太武帝の華北統一によつて自己の新しい中華世界を北魏に求める志向が生起

してきたこと等の要因が存在し、それらが孝文帝期の水徳採用に結實した。ところで、北魏の水徳採用には反對する意見も實は存在したのであり、こちらは「晉(金)↓趙(水)↓燕(木)↓秦(火)↓魏(土)」を正統と見る立場で、中原占據説に立つ。しかし、結局この中原占據説は水徳説の前に敗れ去り、そこで崔鴻は十六國を僭偽とする立場から『十六國春秋』を編纂したのであつて、今日の我々が五胡十六國という時代を想定する歴史認識もこの時に確立された。本章は、前章で述べた胡漢の抗争から融合への流れを、王朝の正統意識を跡づけることによつて確認したものである。北魏以前の五胡政權に、「中華」「王師」という自認はともかく「正統」という意識が存在したかどうか興味が残るが、北魏を中國史として扱う以上は避けて通れない問題といえよう。

第三章は、太武帝廢佛の政治的背景を取り上げる。太武帝期には、崔浩の誅殺、宦官による皇帝謀逆等、短期間のうちに大きな宮廷事件が續發するが、著者によれば監國であつた景穆太子(太武帝の皇太子)の死も皇帝による謀殺の可能性が高い。こうした事件の背景には、華北統一を果たした北魏宮廷内に、さらなる帝權擴大をめざす勢力とそれを望まない勢力との確執が存在し、前者の中心が太武帝と崔浩であり、後者の中心は北魏を自己の正統王朝と認めたがらない漢人士大夫層であつて、監國でありながら朝廷内のイニシアティブを崔浩に握られている景穆太子は必然的に後者の立場に加擔的となる。すなわち、これらの宮廷事件には、單に民族對立というだけではなく、鮮卑北魏を自己の王朝として受け入れるかどうかという漢人間の確執、および華北を統一した北魏を今後どのように導くかという鮮卑指導者間の經營路線對立が、複雑にからみあつて

事件に反映されているのであり、廢佛もそうした確執・對立の一つの現れとする。第一章で、胡漢融合の一つの轉換點と跡づけた太武帝期を、政治史の側面から論考した章である。

第四章は、北魏政治史のうちでも最も重要な政策の一つであるいわゆる「部族解散」を取り上げる。この問題に對する著者の理解方法の特徴は、太祖道武帝の行った政策（著者は「部落解散」と稱す）と高祖孝文帝の政策（「部族解散」と稱す）とに分けてとらえる點である。氏の研究がこうして一書にまとめられると、それは五胡・北朝史の胡漢接觸・融合を段階づけてとらえようとする一連の見方と同一の視座に立つものであることがよくわかる。さて、本章で著者は、まず北魏一代を通じて領民酋長等の酋帥の存在が邊境地帯のみならず畿内にも普遍的に認められること、したがって道武帝の段階で「部族構成員が解散」されたとは考えにくいことを指摘し、さらにそれを補強する形で道武帝後の部族の集住、同姓婚、拓跋部十姓のあり方等を分析し、そうした北族の傳統は孝文帝の改革によつてかなりの部分解消されたと説く。道武帝後も北族の氏部族制が存続するであろう點は、大筋において評者も賛意を表したい。また、いうまでもなく史料には「解散」とは記されず、「部落」「部」を「散」「離散」「分散」したのであり、この「散」を「解體」の意ではなく「移動」に近い意で解釋する點や、孝文帝の改革後も内地洛陽周邊の北族とは別に、六鎮の亂によつて移動し始める北族は部族制的傳統をいまだ色濃く保持して南下してくるととらえる點等は、魅力に富む。しかし、それにもかかわらず、北朝史における本章のテーマの重要性を考える時、つぎのような問題點が残されるのではあるまいか。

まず第一に、道武帝の「部落解散」の内容とそれをその時期に行つた理由とが必ずしも明確になつてはいないこと。それは、本章の冒頭で、部族解散とは「拓跋部に隨從する諸部族に對し斷行されたもの」で、「諸部族に對し皇城周邊への定住を命じ」「族長の部民に對する支配權の國家への移轉とを内容とする」政策といきつてしまつたため、自らの議論がこの枠の中に限定されてしまつたからではないか。それよりはむしろ、官氏志・賀訥傳・高車傳の當該記事の史料批判から迫るべきではなかったか。第二に、その官氏志の記事「凡此四方諸部、歲時朝貢。登國初、太祖散諸部落、初同爲編民。」の「此四方諸部」とは、この前文の神元皇帝期の東西南北の餘部諸姓を指し、それに對して後段はそれよりはるか後世の道武帝期の政策を述べているのであつて、この記事をもつて道武帝が四方の諸部に何らかの對策を行つたとは解釋できないこと。序紀によれば、神元皇帝以後は拓跋部の勢力は弱まり、さらに前秦苻堅の攻撃を受けて部内が壊滅した状態で道武帝は代王の位に即いたのであるから、とすればこの記事の後段は拓跋部内再整理の策を傳えたものではないか。これは、北魏「部族解散」の出發點にかかわる問題である。第三に、孝文帝の「部族解散」で最も重要な政策ともいふべき氏族分定の分析が十分ではないこと。官氏志「太和十九年詔」の難解さには評者も閉口するが、それでもこれは避けては通れない問題であり、分析するのであれば本章がふさわしかったのではないか。

第二篇は、漢族・漢文化と接觸することによつて北族社會がどのように變質したかを、主として政治制度の側面から分析した諸論考。焦點が孝文帝の諸改革に當てられる。

第一章で取り上げられる内朝とは、北魏の「侍官」の總稱であり、具體的には、①北族起源の近侍官（職務は禁中の警備、詔命の出入、日常の下問の答申、尙書の列曹や州鎮の巡察等）、②中書省、③門下省の諸官を指す。このうち、①と③には多くは北族出身者が就任し、②に漢人が就任した。これらの分析によって、著者は、建國以來北魏宮廷内の實權はあくまで北族によって握られていたことを確認する。こうした體制に對する孝文帝の改革は、主として①の北族起源の諸内朝官を廢止すること、および信任厚い中書省の漢人官僚を門下省に遷すこと、によって行われた。改革の目的は、構造面でも構成員數面でも複雑多岐化してしまつた内朝を、中國の官制に基つて機能的に再整理する點にあつた。これによって、北魏の内朝は中書・門下・宣官系に基づく中國の體制に變化し、政治運営の中樞は北族中心體制から脱却したとする。なお、この官制改革に對する北族の不滿が、後述第六章の事件を生むことになる。

第二章では、監察制度の變革を取り上げて前章の結論を補強する。道武帝天興四年以後、孝文帝の官制改革までの約九〇年間、北魏の監察諸官は内朝に所屬していた。その内譯は、①御史臺、②候官、③内侍長、④中散である。このうち、①の御史臺は通常想起される職務とは異なつて軍隊監察を主な任務としており、朝廷内外の非違監察は②以下の官が行っていた。②以下の官は、前章で見た代國以來の拓跋政權の近侍官に由來する。監察機構のこのような分散制には奇異を感じるが、實はこれこそが「北族中心の軍事國家」ともいへば北魏前期の行政體制の特徴なのであらう。ところが、孝文帝の官制改革によつて②以下の官は廢止され、同時にそれ以降は非違彈劾を御史が行つた事例が史料上多數現れるようになる。した

がつて、孝文帝改革によつて北魏の監察權は御史臺に一本化されたことがわかるのであり、著者によれば、その改革は御史臺の外朝化ともになされたものだといふ。すなわち孝文帝の監察制度改革は、北魏の政治制度が中國的な内朝・外朝體制へと移行・變革したことを示す一つの典型的な具體例にはかならないということになる。

以上二編の論考は、北魏の北族中心の支配體制から中國の傳統的支配體制への脱皮を、政治の中樞制度のあり方を分析することによつて追求したものであり、論旨は明快である。著者は、それらの改革を孝文帝による「部族制度」の廢止という社會改革の官制面での現れと解しているのである。

第三章は、北魏の封爵制を、從來いわれるような虚封制ではなく、實封制と見て考察したもの。まず北魏の封爵が實封（食邑）をとまなうものであることは、道武帝天賜元年の受封者二百餘名がいれば建國の功臣であり、しかも彼らが國官を有している點から確認される。受封者は封土を本貫に授けられる場合が多く、これは北魏政府が鄉村支配を在地宗族に依存したためであると考えられる。また、北魏の封爵制の特徴は爵品と官品とがほぼ一致する傾向を示す點にあり、このことから封爵制と就官とが密接な關係にあつたと推測される。すなわち、就官のコースが在地支配のランクに應じて用意されていたと思われ、著者はこうした意味からも北魏の封爵は實封的と見るのである。ところで、この實封體制は、孝文帝による「食邑何戸」という爵制に切りかえられた。それは、三長制施行等による國家權力の在地への伸張と表裏した政策であり、同時に北族の「一體」感を打破する目的で行われた改革と結論づける。單なる

制度の分析ではなく、むしろそこから鄉村支配の方法と變遷という國家社會體制を浮き上がらせた重要な論考といえよう。ただし、讀後に次のような疑問も抱かせられる。すなわち、①登場する受封者に漢人が多く、そのため本章は漢人を封爵の對象として考察されている印象が強く残るが、北族の場合はどうなのか。北族も對象に含むとすると、彼らも漢人と同様に在地支配を委ねられている譯であるから、そうであるならば、この制度による北族の「一體」感とはどこからくるものなのか。②「太祖紀」天賜元年十一月條に見える賜爵者二千餘人（著者によれば虚封）は、北魏封爵制の中でいかに考えればよいのか。また北族の場合、封爵制は虚封・實封ともに、道武帝の行った（著者のいわゆる）「部落解散」の結果と關係があるのかないのか。あるとすれば、それはどのような關係か、の二點である。

第四章は、北魏社會の變質と孝文帝の改革を、①儀禮、②軍制、③婚姻制の側面から追った論考。①の儀禮面では、南郊祭天儀禮と西郊祭天儀禮を取り上げる。前者は、建國の祖神を天に配する中國傳統儀禮であるが、北魏の場合は、道武帝が神元皇帝を始祖として南郊に祭つたのに對し、孝文帝の南郊祭天ではその道武帝を太祖とし、始祖を改めている點が注目される。これは、北魏が五胡政權との連續性を斷ち、自己を正當な中原王朝と位置づけ直した認識と表裏する變革で、第一篇第二章の考察と關連する。後者の西郊祭天は、拓跋部を中心とした部族連合による祭天儀禮で、北族儀禮の名残であるが、こちらは孝文帝によつて廢止された。それと同時に、それまでは拓跋部十姓が握っていた北魏の祭祀權は、國家の職司の管轄下に組み込まれたという。禮制は國家の性格を考える際に大變

重要であり、特に前者の南郊祭天は、現在の我々が北魏初代皇帝を道武帝と認識する原點と思われる。ただしそれならば、例の「嘎仙洞石刻文」に「王業の興りは皇祖より起る」とあり、孝文帝に先立つ太武帝の段階で明らかに道武帝を建國の祖としているのを、どのように解するか。②の軍制面では、殿中尚書率いる殿内の禁軍と、司衛監率いるその他の禁軍とが取り上げられる。いずれも北族系の就任者が多く、北族本來の軍隊構成を色濃く残した兵制であるが、前者は孝文帝の官制改革によつて兵權が取り上げられ、後者は廢止された。これによつて北魏では、領軍將軍が一元的に統帥する中國的な禁軍が創設されるのである。③の婚姻制に關しては、從來北族の間では同部族内での異氏族婚が一般的形態であったが、孝文帝「太和七年詔」（高祖紀上）はそれを禁止した政策と位置づける。これは、漢族の同姓不婚に則つたもので、これ以後は北族と漢族との間の通婚事例が史料上多くなる。こうした傾向は、當然ながら北族の結合を弱める方向に作用し、漢文化の攝取にともなつて北族が自己の言語を喪失してゆく過程にも觸れられる。

以上二編の論考は、制度改革を取り上げながらも、著者の主眼はむしろその背景にある社會の變質に向けられている。第四章においては、孝文帝の改革が一方的に斷行されたのではなく、國初以來の體制の風化と北族の團結の弱體化とを承けてそれがなされたことも浮き上がってくる。具體的にいえば、軍制では北族軍の地方分駐とその永屯の傾向、禮制では西郊祭天の形骸化、婚姻制では北魏の華北統一によつて北族と漢族との緊張關係が弛緩したこと、等である。

第五章は、諸改革に着手した孝文帝の精神世界にメスを入れた考

察。まず、孝文帝の生母問題が取り上げられる。著者は、孝文帝の實母を従来いわれる文明太后馮氏とする説の根據はいずれも薄弱としながらも、新史料『魏書』八三上、李鳳傳の提示によってあらためて文明太后説を採る。馮氏は第四代文成帝の皇后で、漢人出身であり、次代の獻文帝と馮氏とのレヴィエート婚によって孝文帝は出生した。馮氏の死によって自分の生母を初めて知らされ、その生母による父親獻文帝の弑逆を知った孝文帝（時に二三歳）は、その後、洛陽遷都に始まる一連の漢化政策を實行する。彼の精神の奥底で、それまで生活してきた北族世界から脱却しようとする意志が強く働いたと推測されるのである。それならば、その孝文帝の北族に對する意識はどのようなものであったのか。著者は、孝道重視や漢文化への精通から、孝文帝は自己を中國に連續するものと意識しており、その政治的立場も華夷意識は極めて希薄であり、どちらかというとむしろ漢人の立場から諸政策を實行したと見る。出生や血統、教育がその皇帝の政策に影響を及ぼす場合が多いのはいうまでもなく、本章は本書中で一つのアクセント的な章となっている。

第六章では、上述の孝文帝の改革に對する北族の不滿から起こったとされる二種の事件を取り上げる。その一つ、太和二十年の謀反事件は、確かに漢化に反對する動きではあるが、それは北族集團が強固に結束して起こしたものではなく、漢人優遇による疎外感や特權喪失の意識等、謀反加擔者が各自の雑多な不滿によって起こした事件であって、それはむしろ北族集團の形骸化と崩壞進行過程においてその本質を把握すべき動向とする。もう一つの北鎮の亂（六鎮の亂）についても同様で、それは孝文帝の改革以前の狀況に復歸しようとする指向性は弱く、北鎮内における上級鎮民（主に北族）に

對する下級鎮民（主に被征服民）の不滿に端を發し、それが上級鎮民の中央政府への不滿にまで發展した點に、亂の本質があるとす。いずれも、事件の背景に國初以來の北族集團の崩壞狀況と階層分化を認識する見解である。確かに、六鎮の亂の場合、北族集團が孝文帝以後の漢化政策路線に不滿をもって反抗を企てたと見るのは單純に過ぎるかもしれない。しかし、現體制の打破という形で現出した不滿が、復古路線をとるとは限らないのはいずれの反亂も同様であって、實際には新體制確立を指向するものである。六鎮の亂もまさにそうなのであって、とすれば、著者の指摘に従うとしても、それならばこの反亂が何を據して何を生み出したのかという問題にもどりが着くのではなからうか。著者は、この反亂の本質を民族分定によって固定化した階級間の鬭争と見るが、それならば民族分定が何をどのように作り上げた制度で、六鎮の亂がそれをどのように變えたのか、さらに踏み込んだ分析が必要となるのではないだろうか。

第三篇は、これまで述べてきた北族・漢族の融合が、「中國史」の上でどのような意味をもつかを考察した三編の論考。

第一章は、中國史研究において重要な問題である「良・奴」身分制の確立を、北魏の統治體制と關係づけて論じる。『魏書』序紀には拓跋部構成員を「國人」と呼稱するが、道武帝以後の史料にはそれに代わって「北人」「南人」「舊人」「新人」なる用語が散見される。北人とは、主として種々の言語を使用する北族の集まりを指し、南人とは華北の漢人、もしくは南朝からの歸降人を指す場合が多い。一方、舊人とは古くから北魏配下にある民を指し、新人と

は一般に新しく北魏に入附した民を指す。もちろん、これらの語で示される實體は時代とともに變化し、新人は時間を経て舊人となる。そして、もし良奴制が北魏以前に成立し、それを北魏が適用しているのであれば、北人・南人も舊人・新人もいずれも良身分とされるはずである。ところで、こうした支配民分類の背後では、南人より優越感を抱く北人、および新人を排斥しようとする舊人側と、新人を庇護して權力擴大をめざす皇帝側との暗闘が存在するのであり、北魏史における政治闘争はこの對立圖式をとる場合が多い。ところが、北魏が華北を統一し、鮮卑拓跋部より高水準の文化をもつ南人・新人が壓倒的多數を占めるようになると、この北南・舊新の對立の緊張感が薄れ、かわって北魏はより普遍的な民衆統治理念の導入の必要性に迫られる。それが良奴制であり、そこには新人の舊人化（正式な國家構成員化）の狙いがあった。かくして良奴制は北魏孝文帝期に確立し、それが隋唐良賤制につながるというのが、本章の論旨である。問題が重大であり、他の要素との関係も考慮しなければならず、またそれならば「奴」身分は北魏ではどのように位置づけられたのかという問題も残される。さらにいえば、良奴制確立を孝文帝期とする大前提が本章にはあるように思えなくもないが、本書のこれまでの考察との関連からいえば、著者の論旨は概ね首肯できる。中國史研究が「漢民族の歴史の發展」という視點からだけでは不十分であることを、あらためて考えさせられる。

第二章は、西魏・北周の周禮主義が、前時代のどのような風潮を承けて形成されるのかを探る。五胡の君主の多くが自らの始源を三皇五帝に求め、また周の文王を仰ぎ慕うように、概ね彼らはまだ夷夏の分離しない周以前に好感を抱いていた。それが政策面で現れる

のは、北魏道武帝が周禮の六官や祠天儀禮を範にとった例に萌芽が見え、太武帝期には周禮を國策決定の基準とする姿勢さえが見出される。こうした周禮重視の風潮は、ひとり北族側のみのものではなく、漢族側においても、太武帝の華北統一によって北魏を自己の國と見る思想の生成とともに、「周の尊重十魏督批判」の路線が具體性を帯び始めるという。北魏の均田制が井田制を、三長制が周の郷黨理念の影響を受けていることはしばしばいわれるが、著者によればそれだけでなく、俸祿制・度量衡制・宮殿制・後宮制・七廟制等、孝文帝の諸改革はより深い根本的な部分において周制を意識し、また模範としている。均田制や三長制はそうした総合的な周禮主義の一部であり、そればかりか洛陽遷都ですらそれと軌を一にする政策だと言える。北朝における周禮受容は取り上げられるべき問題であり、本章のいうとおりだとすると、西魏・北周の政治路線は北魏の直接の後繼者としての面目をもつことになり、それを門閥主義に對する反動ととらえる見方は修正を迫られることになりそうである。貴族制の専家の意見を聞きたいところである。なお本章の論旨の基底にかかわることであるが、史書を書き残した漢人の志向が史料に反映しているのではないかという見方を否定しなくてよいのかどうか、いささか氣にかかる。

第三章は、北族の漢化が中國史にどのような歴史的役割をはたしたのか、すなわち本篇の主題を直接取り上げる。まず前半では、以前より中國に存在した要素が北族によって純化されて後世に受け継がれた例として、墓誌の形式と良奴制の確立が指摘される（このうち良奴制の問題は本篇第一章で述べたとおり）。墓誌は、北魏洛陽遷都後に短期間のうちにその形式が定型化され、これが隋唐あるい

はそれ以後に受け継がれる。この時期に形式が確立し、しかもそれが皇族元氏のものが多い点から、確かに墓誌定型化は孝文帝期の時代風潮との関連が推測されよう。ただし本書では、その具體的な要因までは述べられてはいない。後半では、北族固有の要素と中國古來の要素との出會いによって新しい文化が生み出された例として、府兵制の八柱國二十四軍體制を取り上げる。八柱國の「八」は、八姓・八部・八國等、拓跋政權がつねにその國家體制の中樞とした數概念であり、それから宇文泰と元氏を除いた六柱國という數は周制の六官・六軍の影響が認められ、それに楚官の柱國、後漢の柱國大將軍の官稱が合わさってできたのが八柱國の軍制であったと説く。

孝文帝以後の北族には漢族に對するコンプレックスは全くなく、以上の新文化は北族要素・漢族要素の區別なくいづれもを自己の文化とする時代相の上に成り立つとするのは、重要な指摘であろう。ただ、本章が「胡族漢化の實態」と銘打たれるのであれば、史料の制約をうけるであろうが、こうした理念の問題とは別にもう少し具體的な融合の實態、例えば家族制、村落制、生活習俗の變化等にももう少し目を向けてしかるべきではないか。

次の第四篇では視野を華中・華南に轉じ、當該時期の史料に「蠻」と總稱されて登場する非漢族が、南方に發展した漢族とどのように接觸し、またそれが隋唐にどのように受け継がれるのかを展望する。

まず第一章では、蠻の漢化の過程・形態を、それが蠻に對する漢族國家權力の干渉によって生じる場合と、一般漢人との接觸によって生じる場合とに分けて考察する。前者のケースでは、蠻族地帯へ

の課税や蠻人そのものの略取・賤隸化だけでなく、漢族國家による蠻の田土・鑛山・鹽井等の略奪の事象が散見される。こうしたことは、蠻の脅威に對する防衛という側面とは別に、經濟的な利益を狙つての漢族の蠻地進出を示しており、後世と比較して當該時代における漢族膨張の特徴の一つとする。後者のケースでは、漢人が商人として蠻域に入境する例や接觸地帯に市を立てる例、あるいは苛政から逃れて蠻域に逃入する例があり、逆に蠻人が漢人地域に季節労働者の形態で入境する例等も認められ、中には蠻族有力者と婚姻關係を結んで蠻漢兩族にまたがる地域豪強と化す漢人の存在が指摘される。その結果、蠻人の漢族官界への進出とそれを恒常的に可能にするルートが國家側に開かれること、國家が熟蠻を課税對象である良民として支配しようとする動きを見せ始めること等、蠻族が自らの文化を漸次喪失して中國政治秩序の中に組み込まれていく過程が追求される。

第二章は、蠻の集落のあり方に着目して、前章の考察をより深めた内容。まず「山越」を例に取り、山越は漢族から蠻として認識される存在ではあつても、だからといって彼らは全く未開の種族という譯ではなく、その一部はすでに吳の時代から郡縣制下に取り込まれ、また吳の兵力の主要部分を構成するなど、相當文明化（あるいは漢化）していたことを確認する。ついで、山越を含む蠻の集落「洞」を取り上げ、それが史料上は特に梁末から頻出すること、洞の背景には梁末の動亂と中央支配力の弱体化があげられること、洞には漢化した蠻人が居住するだけでなく、福建の陳寶應や馮氏、江西の劉敬躬など、蠻化した漢族が蠻族と提携して地域豪強化する傾向が認められるとする。これらのことから、梁末陳初の反亂で動きを

しめす「渠帥」率いる勢力は大部分が非漢族であるとしながらも、それは實際には漢化した蠻族、および蠻化した漢族であり、そこに六朝期の蠻の漢化過程の深化と、蠻漢融合地帯の擴大化を見る。そしてこのことは、六朝期の江南を蠻漢二元的な分別によって理解しようとする見方は妥當性を欠き、そこには蠻漢の混じり合う廣大なフロンティア地帯を想定する必要性があるという主張に收斂されていく。

第三章は、その蠻の分布状況や社會のあり方を地域ごとに史料を分類・整理したもの。取り上げられる地域は、河南・淮北、淮南、長江下流域、福建、江西、湖北、湖南であり、各地方ごとに蠻の「分布」「人口」「状況（漢人國家や漢文化との接觸状況、自然環境等）」「豪強」「後代（唐・宋代）の状況」に従って史料を整理する。當該時代の蠻の姿を知る恰好の史料集となっている。これらの地域は現在では大部分が漢族の居住地となっているが、そうした状況はすでに唐代にはほぼできあがっていたと思われる。なぜなら、唐代にはこれらの地域には羈縻州が置かれず、内地州縣制が施行されるからである。このことは、とりもなおさず江南の蠻族社會の漢化が魏晉南北朝期に進行したことを物語っているものであり、本篇の三論文はその漢化の状況を追求したものと解してよい。本章の對象から四川、雲南、貴州、兩廣地方がはずされているのは、これらの地域が今日でも多數の非漢族が居住しているからであり、このことから著者の考察が「漢化」を念頭に置いたものであることがよくわかる。

南方における民族接觸・融合は中國史上の一つの重要な研究テーマであり、それが本格的におこった魏晉南北朝の南方世界を總體

的に取り上げた本篇の意義は深い。特に、蠻漢融合の過程に兩者の經濟面での接觸を見る視點や、蠻と漢を二元的にとらえるのではなく、その中間・混合地帯を設定する指摘は重要である。本篇を、後世の宋代の華南諸種族を取り上げた岡田宏二氏の分析と比較してみるのは、興味深い作業かもしれない。それによって、唐宋への展望がつかめるからである。また、當該時代の蠻族の中には、山岳部に居住し、そこから河川に沿って平野部に下りてきて漢族と接觸する事例が見られ、こうした高低差による民族の棲み分けは唐代の四川の羌族にも見られるばかりか、今日の雲南等にも認められる。すると、清代の例であるが、華中・華南の「山區經濟」のあり方は、それ以前の蠻漢の經濟面での接觸を考察する際にも、我々は念頭に置いておくべきであろう。もちろん、これらは本書の責任外の問題である。なお、當該時代に即していえば、三國時代の要衝荊州において武陵蠻が果たした役割や、宋・齊時代の蠻の一部は南北朝の對立の接點地帯に居住していたがために漢化と移動をおこすという、谷口房男氏の指摘には、觸れておくべきではなかったか。

第五篇は、視野をさらに朝鮮、日本へと廣げ、當該時代の日中交渉と、中國・朝鮮・日本の社會體制を比較する。

第一章は、倭の五王に見られるように、この時代の日本の中國遣使が宋朝一朝に集中している謎から出發し、その理由を主として中國（特に北魏）側の情勢から説明した論考。まず、倭の五王時代の中國遣使ルートは、對馬海峡から朝鮮半島西岸を海路北上し、黃海を横斷して山東半島に至るルートであった點を確認する。ついで、東晉末く宋初期に高句麗や倭が中國遣使を再開させる最大の要因と

して、南燕滅亡後の山東を南朝が制壓し、朝鮮―山東―内陸水路―南朝のルートが開通した點を指摘する。それが、北魏の勢力東進によって様相が變わり始め、山東の北魏領化と、淮水・長江河口沿岸地帯に良港がないことによって倭の南朝遣使が困難となり、そこに百濟王都・漢城の高句麗による陥落がかさなって倭の外交路線は再検討を迫られ、それが遣使斷絶をもたらし。以上が、宋朝一代に日本遣使が集中している理由であるとする。これまで幾多の論文が發表された倭の五王とその時代の日中關係であるが、それをほぼ全面的に中國側の情勢から説き明かした考察。論旨は明快であり、今後倭の五王研究にあたって參考されるべき論考となる。

第二章は、北魏・朝鮮三國・日本における制度面での類似性とその理由に目を向ける。正直にいうと、本書中で最も難解なのが本章であった。評者なりに要約すれば、次のようになる。當時の東アジア諸國の政治制度・社會體制を比較すると、①北魏の内朝、高句麗の中裏制、百濟の内官十二部司の前内部、新羅の内省、倭國のトモのごとく、氏族を母體にした王の側近官組織、②倭國の倉人・酒人等の「人」、新羅の旨爲人・助人等の「人」、北魏の比德眞・胡洛眞等の「眞(人)」のごとく、側近官の「人制」的官司制、③北魏の八部、高句麗の五部、百濟の五部、新羅の六部のごとく、族制に基づくいくつかの行政区畫(日本の部民も擬制的血縁關係という側面では北魏の氏・部族制と共通性がある)、④北魏の拓跋部構成員たる「舊人」と被征服種族である「新人」、廣開土王碑文に見える「舊民」と被征服民たる「韓・穢二百廿家」、新羅の「六部人」と「新附人」のごとく、舊來の支配民と新來の被征服民とを區別する統治體制、の諸點において、北魏・朝鮮三國・日本の制度には單な

る偶然とは思えない類似性が認められる。こうした類似性が生じた理由としては、北魏の諸制度が朝鮮または後の隋唐を経由して間接的に日本に傳えられたと考えられるだけでなく、これら諸民族が氏族制社會から古代國家建設へと向かい始めた際に、その建設プランを王號を授與された中國のプランから吸収したために、共通した經過をたどる必然性があつた、と。以上の理解に大過ないと思えば、朝鮮・日本の制度は北魏のものを直接模倣したものではなく、さらにその北魏のモデルとなつた源制度が中國にあり、それが北魏・朝鮮・日本に影響を與えたということになる。そして、ここで著者のいわれるこれらの民族に王號を授與し、諸制度のモデルとなつた中國とは晉王朝以外にはありえない。そうであれば、晉の體制がどのようなもので、それが鮮卑・朝鮮・倭のどのような固有の體制にいかなる點で影響を與えたのかを追求しなければ、上述のような結論にはたどり着けないのではなからうか。これら諸民族が氏族制社會から古代國家建設にむかうとはいっても、そのあり方には當然違いがあるであらうし、その差異を見ずに共通性のみを追うだけでは、比較方法に問題が残されるのではあるまいか。

第三章は、前章で取り上げた諸制度のうち、高句麗の「五部」と北魏の「部」制との關連に焦點をあてる。高句麗には桂婁部・靺奴部・順奴部・漚奴部・消奴部(消奴部)の魏志東夷傳の五部と、内・北・東・南・西部の「高麗記」(『翰苑』卷三〇)の五部の二セツトの五部が史料上確認されるが、方角を右回りに記述する法則から見て、桂婁部を内部、靺奴部を北部、順奴部を東部、漚奴部を南部、消奴部(消奴部)を西部に一致させる『高麗記』の理解は首肯されるべきだとする。右回りの方角記述は、著者があげる百濟の例

だけでなく、突厥の前(東)、右(南)、後(西)、左(北)や、『魏書』官民志の四方諸部の記載順等に見られるように當時の北方民族の習慣であり、したがって高句麗の場合、王族たる桂婁部(内部)が第一に、王族の婚族たる絶奴部(北部)が第二に置かれ、ついで東方から右回りに記述されるとする點は納得できる。ただし著者は、こうした一致はあくまでも方角上の問題であって、二種の五部の實體までが一致すると述べている譯ではない。それは、高句麗の桂婁部等の「部」はあくまでも中國側が理解を容易にするために附加させた用語であり、『三國志』の段階ではいゆる「那體制」の五族集團を中國側の概念で「部」と表記したにすぎないと解されるからである。ところが、『高麗記』の段階では高句麗人自らが「部」という呼稱を用いており、ここに高句麗内部の社會體制の實質的變化(五部制への移行)が想定される。その變化は、「方位部+大人」制の導入と同様に、郷接する五胡の燕の影響と見るのが妥當であり、その時期は高句麗の平壤遷都以前のことと考えられる。すなわち、以上の論旨を逆にたどれば、①燕にも北魏と同様に部大人制が存在した、②それが高句麗に影響を與えた、③それによって高句麗固有の五族が五部制に移行した、ということになる。

本篇所収の三論文は日本・朝鮮古代史の分野にも關わり、それらをそれぞれの國內の事情だけでなく、當時の中國情勢との關係をも視野に入れる必要性を問いかけている。その意味では重要な問題意識である。ただし、その關係を分析する際に類似性・共通性だけを追うのでは限界がある點もまた感じさせるのであり、同時に假説がやや多い印象を受ける。また、第二章の巨視的に見た中國文化の影響と、第三章の高句麗の社會體制を五胡・北魏の影響と見る視點と

が論理的にどのように關わるのかという點は、もう少し掘り下げてもよかったのではないか。本書の「おわりに」で著者自身が述べられているように、第五篇の問題は今後さらに検討を要しよう。

「おわりに」では、その第五篇のテーマと關連して、二つの點が述べられる。一つは、古代東アジア諸國家における中華意識の問題である。これら諸國家が中華思想を導入もしくは形成したことは從來いわれるとおりであるが、その際の中華思想とは漢然と周代あるいはそれを受けた漢代の思想を念頭に置きがちであった。しかしながら、同時代の中國における中華思想は、漢代以後の華夷觀の變遷や胡族國家の正統性をめぐって再編成されたものであり、それを視野に入れずに東アジア諸國家の中華意識形成を語るのは片手落ちである點が指摘される。

もう一つは、そうした中華意識の傳播・形成に大きな役割を果たした渡來人の問題である。上述のとおり、北魏・高句麗・百濟・新羅・倭には「部」の制度が存在し、それらはいずれも「部」「部」と發音し、王都周邊に集住した軍事行政的性格を基礎とする。このような共通した現象は、「部」という漢語表記で一定のイメージを描き得た人々によってもたらされるものである。とすれば、その媒體として、漢族の外地への進出と外地政權への參畫、もしくはそれによって中國の體制を熟知した人々のさらに外側への進出を想定しなければならぬ。それこそが、進出を受けた側から見れば「渡來人」にほかならず、彼らは「舊人」から見れば「新人」にほかならない。先述の第五篇の第二章と第三章との關わり方についての疑問には、ここで一つの回答が與えられるようである。すなわち、漢魏

晉期の中國文化そのものが朝鮮・日本に傳つたのではなく、中國固有の文化は北族との接觸によつて形を変え、その變容した中國文化が渡來人によつて周邊地域にもたらされたとする見方である。漢帝國崩壞後の民族移動と異文化接觸から筆を起こした本書が、最後に朝鮮三國と日本にまで視野を廣げたのは、ここにその必要性があつたのである。

さて、以上が各篇・各章の要約および簡評である。本書は、魏晉南北朝期における北族・漢族・蠻族の接觸と融合、それによる中國社會の變質、および東方地域へのその影響を、種々の側面から論じる。本書を貫く主要テーマを一言で表現すれば、それこそ「漢民族そのものの變容」にはかならない。全體として本書は、中國史が「秦漢以來の漢族の歴史」という枠内では解けないことを明示しているのである。従來、問題として意識される割りには意外と專論されることの少なかった本テーマを、正面から取り上げて論じた本書の意義は、非常に大きいといわねばならない。特に、北魏の官制・封爵制等の諸制度の仕組みに北族的色彩を見て取り、そこから氏族制社會の姿を浮き彫りにし、それがどのように變質したのかを明らかにした點は、重要である。そうした内容を直接傳える史料はもちろん存在せず、『魏書』の斷片的記事からその背後の姿を浮き上がらせた手腕は、高く評價されるであらう。さらには、その北朝がなぜ後世に現れるような征服王朝の形をとらなかつたのか、遼・金等の國家體制と比較考察するにあたつても、本書は恰好の材料となるであらう。

このように重要な研究であるが、それにもかかわらず、本書を讀

み終えて不満に感じた點が全くない譯ではない。最後にそれらを述べて、批評にかえた。

まず第一に、北族の社會體制が原初的形態から中國王朝的體制に變質してゆく過程・要因が、第一篇から第三篇において様々な側面から詳述されるのであるが、それらの結論はいずれも孝文帝期に完成をみるものである。したがつて、これらの分析には、北魏史の底流を追うにあつて、孝文帝期を一つの到達點とする前提があらかじめあるように感ぜられてしまう點である。

第二としては、そのために、それらが孝文帝以後の北朝、特に隋唐にどのようにつながるのかという點が、今一つ明確にならないことである。かつて谷川道雄氏は、この點を明らかにせんとして『隋唐帝國形成史論』を發表された。谷川書の意義は今日の學界においても決して失われてはおらず、本書はその谷川説とどのようにかわるのか、この點が必ずしも明確に浮かび上がつてはこない。孝文帝以後の時代への視點は、本書第五篇とも密接に關係するはずである。

第三には、孝文帝「氏族分定」の分析がなされていない點である。「氏族分定」は本書のテーマでは避けては通れない問題であり、いずれかの場所に一章を割いて專論すべきではなかつたか。それがなされなかつたことが、以上のような問題が残された一つの理由となつてゐるのではなからうか。

最後に、本書の主要部分を占める北朝史研究は、いうまでもなく漢人が書き残した史料をもとに行われる。したがつてそこには、北族の姿や彼らの行つた政策がストリートに書き記されているのではなく、漢人流の記録のしかたや作法をとつて傳わつてゐる部

分が少なくないと思われる。その割りには、本書は史料に對して批判的に目を向ける精神がやや乏しいのではないだろうか。もちろん、そうした史料しか残されていないのであるから、困難であることは理解できるが、『魏書』等の記事を鵜呑みにして見誤ることがないのかどうか、こうした危惧を抱くのは評者のみであらうか。

以上のような、敢えて粗探しのごとき批評を加えてみたところで、いうまでもなく本書の價值が下がるものではない。本書は、今後の魏晉南北朝史研究において必ず參考にされるはずであり、學界に多大な影響を残すことは間違いない。だからこそ、敢えて附け加えていただいた。理解不足のために誤解している點があれば、著者のご寛恕を切に願いたい。

註

(1) その後、川本氏は四川を對象として同様の分析を行っている。川本芳昭「民族問題を中心としてみた魏晉段階における四川地域の状況について」(唐代史研究會『東アジア史における

國家と地域』刀水書房、一九九九年)、「民族問題を中心としてみた五胡十六國南北朝階段における四川地域の状況について」(『史淵』一三六、一九九九年)、「民族問題を中心としてみた北朝後期段階における四川地域の状況について」(九州大學『東洋史論集』二七、一九九九年)。

(2) 岡田宏二『中國華南民族社會史研究』(汲古書院、一九九三年)。

(3) 一例をあげれば『宋書』卷七七、柳元景傳に見える劉道產の記事(標點本、一九八一頁)。

(4) 岸本美緒『東アジアの「近世」』(山川出版社、一九九八年)、七二頁以下。

(5) 谷口房男『華南民族史研究』(綠蔭書房、一九九七年)、第一編第二章「三國時代の武陵蠻」、第三章「宋・齊時代の蠻」。

一九九八年十一月 東京 汲古書院
A 5判 六三一十六頁 一四〇〇〇圓